

語り手の在りように

関する一考察

『三人妻』における助動詞「けり」をめぐって

曾根原 奈美

一、研究の目的

物語の中で、登場人物について説明したり、物語を進展させていく者のことを語り手と呼ぶ。つまり、物語の中で地の文の箇所は、すべて語り手の言葉ということになるのである。このことは、三人称で書かれている作品であればどれも言えることであるが、近代文学作品では、普段、語り手の存在は、あまり意識される事がない。

明治初期の頃の作品には、語り手の存在が表れ見えることがあるが、その場合も注目されているのは、語り手の挿評（意見・感想・判断）の箇所に限られている。しかし、物語の地の文は、通して語り手の言葉なのであるから、他の観点からも語り手の在りようを捉えることができるはずである。話者の意識を示す働きのある助動詞も、語り手の在りようを捉えるための一手がかりとなる。明治時代に文語で書かれた『三人妻』の語り手の在りよ

うの一面を、助動詞「けり」に注目し捉えることがこの論文の目的である。

二、助動詞「けり」の捉え方

助動詞「けり」は、一般的に話者の「間接的経験」の意を表すと捉えられている。一方、これと比較の対象となる助動詞「き」の方は、話者の「自己の経験的過去」を表す意が基本的にあると言われている。これらは、話者の経験性を意識した定義である。しかし、物語の地の文を検討していく場合、明らかにこの定義は成り立たない。その場合、語り手が話者ということになるが、一般的に文学の世界が虚構の世界であることが認められているので、語り手の経験性を問題にする必要はないのである。

『三人妻』の地の文を調査すると、以下に示すように助動詞「き」「けり」の間には何らかの使い分けがなされていることが予測される。

『三人妻』前編の地の文において、助動詞「き」と「けり」の数の比較すると、総数は「き」が一〇七例、「けり」が二三三例で、それぞれの総数のうち文末を占める割合は、「き」が八・四一％（文中に九八例、文末に九例）、「けり」が五六・四％（文中に五八例、文末に七五例）である。文末に現れる割合を助動詞「き」と「け

り」で比較すれば、「き」が一分、「けり」が八割九分ということになる。助動詞「き」「けり」の現れ方にはこのような差があり、二つの助動詞の間には、何らかの使いわけが為されていることが予想される。今は、助動詞「き」と「けり」のみについて文末に現れる割合を比較したのであり、当然文末には他の語も使われているわけであるが、助動詞「けり」が文末に現れやすい性質を持ち合わせていることは予想される。

しかし、実際、『三人妻』において助動詞「けり」は、文末だけでなく、文中にも半数近く用いられているのであり、文末に現れやすいというのが、助動詞「けり」の性質というわけではないということには注意が必要である。文末に表れやすいという現象を起こす根本的な性格を、この助動詞は持ち合わせているのである。しかし、それは、語り手の経験性が問題にされているのではない。助動詞「き」が、単に物語の世界の事柄を述べる時に用いられているのに対して、「けり」は、その事に、語り手の何らかの意識をも添えているのである。つまり、物語の世界の事柄を直接的に語らないで、語り手がいったん語ってきたことをまとめて提示している表れである。

三、助動詞「けり」が現れやすい箇所

物語の構成上から捉えた場合

「三人妻」の前編は、主人公余五郎が、三人の女性を獲得していく過程が語られている。構成を図解すると以下のようである。

(物語の世界の世間一般の様子)

才蔵獲得に関わる語り

余五郎の人物説明の箇所「余りの訝しさに素性を糺せば、(中略)……いかさま尋常ならぬ面魂と皆送りぬ。」麻子の人物説明の箇所「同車は東髪の白襟紋服の女なり。:(中略)……出入りの男女生神のごとく敬ひ奉るなりけり。」

才蔵とても、心を通わせし男と切れて、思の外なる髻に根引かれたは口借しけれど、今日の心持は万更にもあらず。今となりて見れば、大尽の心切卒に身に浸みて、義理から捨て難き気にもなれば、おのづから待遇にも情籠りて、どうやら無理根引の花とは格別の処ありと見るほど、無性に御感に入りて、当分此へ毎日の御入来、御目附大谷伝内、これはと眉を蹙むるなりけり。

お角獲得に関わる語り

素六の人物説明の箇所「爰に墨田川の沿岸に一町四方

の別業を構へて、…(中略)…此館を又無き処悦ぶなり
けり。」

お角といふ名は賤しとて紅梅と呼換へ、かの銀公が唐衣、きては寐る夜の重なりて、秋の半ともなりぬるに、其後は更に腹の脹るゝ気色も見えず。乳頭の色も其俛にて張れる様子は無く、身体も常に復りて、妊娠にてはあらざりけり。お角は之を悲みて、余五郎の顔見る度に返らぬ愚痴をいうて、可厭がられぬ日は呵らるゝなりけり。

← (余五郎が才蔵のもとを訪れる)

← (余五郎がお角のもとを訪れる)

← お艶獲得に関わる語り

この霜月十二日は余五郎が亡母の十三年忌にあたれば、立還りて法事を営むべし、と父余兵衛より見苦しき代筆の書状来にけり。

← 猶様々に案じ煩らへども、六分までは此方の物、と窃に葛城へ様子を通ずれば、其夕余五郎来りて無理に説伏せ、轟夫婦の前にて強制の盃事ありけり。

まず、話は語り手が物語の世界の世間一般の様子を語ることから始まる。それに続け、余五郎が才蔵を手に入れるまで、そして、お角を獲得するまでの様子が語られる。その話に一段落つくと、余五郎が久しぶりに才蔵のもとを訪れるエピソードが語られ、また、彼がお角のもとを訪れるエピソードが語られる。そして、最後に、お艶を獲得するまでの話となる。お艶についての話が終わるところが、『三人妻』前編の終わりである。このように、それぞれの女性をめぐつてのエピソードは個々にまとまつており、それぞれ才蔵、お角、お艶獲得に関わる語りの箇所としてまとめることができる。そして、この各々のまとまりの最後は、助動詞「けり」が用いられている。

「お艶獲得に関わる語り」の箇所の場合、まとまりの始めの文の文末も助動詞「けり」である。他の二人、才蔵、お角について語っている箇所の場合は、まとまりの始めに、その場面の展開に関わってくる人物についての説明されている箇所があり、そのまとまりは「けり」で結ばれている。以後、このような箇所のことを人物説明の箇所と呼ぶことにする。

阪倉篤義氏は、『竹取物語』の中の貴公子の苦心談が、助動詞「けり」の文に挟まれる形で並存している現象を「枠入りの叙述様式」と捉えている(『日本古典文学大系』『竹取物語』解説)昭和三十三年 岩波書店)。「三

人妻』の余五郎が三人の女性を獲得していくという構成も、ひとまとまりの箇所が文末に助動詞「けり」を用いた文に挟まれている点ではこれと共通している。しかし、『三人妻』の場合、阪倉氏が『竹取物語』で指摘するように各エピソードの長さに均等性がなく、「粹」は、先に作られていたというよりも、語り手が語ってきた事柄をまとめて提示する必要のある箇所に「けり」を用いた結果起こった現象として考えられる。一エピソードの終わりは、そこが話の転機となるため、語り手はいったんそれまでに語ってきた事柄をまとめて提示する必要がある、また、あるエピソードの始めには、そこで活躍する人物や、場面設定についてまとめて提示し、説明する必要があるということなのである。

個々のエピソードの中を検討した場合

物語全体の構成上からいえば、助動詞「けり」を境として、才蔵の事に関する語りからお角の事に関する語りへとという大きな転換が見られた。大きくまとめられている中を更に細かく見ていくと、「才蔵獲得に関わる語り」の中の語られている場面（対象）が転換する箇所にも助動詞「けり」が用いられていることが分かる。以後、一エピソードのまとまりの前後に現れ、粹として存在している「けり」以外のものに注目していく。

・語られている物語の場面（対象）の転機

章末が助動詞「けり」となる第五章の終わりは、語られている場面（対象）の転換が起こっている箇所である。

第五章の途中から第六章にかけては、通して（磯馴）というお店の中での様子についての語りが続いている。磯馴は、才蔵がただ一人と情をかけている菊住が、小メという女と浮気をしていると噂の店である。まず、語り手は、そこへ様子を窺いに来た才蔵とその友人の金太郎のことについて語っている。湯治先の熱海で菊住の浮気のことを聞いた才蔵は、慌てて江戸へと引き返ってきて、その知らせをくれた金太郎と二人、噂の店に乗り込み、菊住たちが部屋を借りているようなので、自分たちも側に部屋を借りて様子を窺っているのである。

二人が部屋の中から廊下の様子が見える位置に座り待ち構えていると、しばらくして、すっかり酔っぱらった菊住と小メが、部屋から廊下へ出て出てくる。ここでは、部屋の中から廊下の様子を窺う才蔵と金太郎と、自分たちの部屋から廊下に出てきてふらふらしている菊住と小メという対比が成り立っている。そして、問題の第五章の終わりは、廊下の菊住と小メの様子が中心に語られている。小メに甘えられ、小メをおぶりふらふらとしている菊住の様子を見て、あまりの醜態ぶりに、才蔵は腹も立つし、愛相もつき障子を打鳴らすと、その音に驚いた菊住は、慌てて躓き、菊住と小メの二人は、そこに倒れ

てしまうのである。

第五章の章末の一文を示すと次の通りである。「腹も立つやら愛相も尽きるやら、此馬鹿もの、人に愧ぢぬかと障子をどさどさ才蔵の打鳴せば、此音に驚きて、遁入らむと、慌てゝ躓けば、縁も抜けむばかりに轟かして、沢庵庄に僵れてけり。」第五章がこのように終わると、第六章の始めからは、語りは変わつて、部屋の中にいる才蔵と金太郎のことへと移っていく。才蔵は、菊住と小メが仲良くしている現場を目撃し、菊住が自分から小メへと乗換えたのは、全く怒からのことで、彼女と我とを比べたら、自分の方が良いに決まっているものを、と不満を抱くが、金太郎の手前悔しい気持ちを押さえようとしている。しかし、さすがに苛立つてくる気持ちを抑えることができず酒に紛らしているのである。一方、才蔵のそんな様子を金太郎は非常に齒痒がつているのである。第五章の章末で、廊下をふらふらとしている菊住と小メのことを語っていた語り手は、第六章に入った後は、部屋の内にいる才蔵と金太郎の様子を語り始めている。第五章の終わりの箇所助動詞「けり」が置かれるのは、このように、物語の現場が菊住と小メのいる廊下から才蔵と金太郎のいる部屋の中へと移っているからである。つまり、助動詞「けり」を境にして語り手の語る人物（対象SG）が変化しているのである。

さて、磯馴の場面を、もう一度振り返ってみると、廊

下の菊住と小メの様子を説明する語りに入る前にも、部屋の中にいる才蔵と金太郎について語られている箇所があった。磯馴の場面の語りは、磯馴に駆けつけてきた才蔵と金太郎のことから語られ始めていたのである。その、部屋の中の才蔵と金太郎についての語りから、廊下の菊住と小メについての語りへと転換している箇所にも、助動詞「けり」が置かれているのである。才蔵と金太郎は磯馴へたどり着くと、菊住と小メがいるらしい部屋から一間空けた部屋に部屋を借りて、様子を窺っていた。その部屋からは、話し声が幽かにするだけで、物音もしないので、才蔵はそこにいるのが本当に菊住たちなのか確証も持てずに、金太郎に確かめ、金太郎は才蔵に目くばせをする。そして、二人は、庭に面した障子を細めに開けて「出て来たらば」と目を離さないで待ちかまえていたのである。ここまで、語り手は、菊住と小メを待つ才蔵と金太郎の様子について語っているのであるが、

出て来らばと目を放たで待ちけるに、繫絲織の羽織着たる男、此方に氣を置きつゝ野鼠々と現はれて行くを透し見れば、帯から小袖まで我贈りしとは異なる風俗。これ皆小メが仕着を悦びて、我見よがしに着飾れる菊住なり。

と、「待ちけるに、……」の「ける（けり）」を境にして、語りの中心は、菊住と小メの様子についてとなる。そして、第五章の章末までは、そのまま廊下の菊住と小

へについての語りが続くのである。

引用箇所「けり」を境にして菊住の様子について語りが始まったのであるが、それ以降、語り手の言葉であるのか登場人物才蔵の言葉であるのか分からなくなつてしまふ語り手と才蔵の同化が起こつたり、才蔵の内語が挿入されているため、廊下の菊住と小へについての語りは複雑になつている。引用箇所中、「帯から小袖まで我贈りしとは異なる風俗。これ皆小へが仕着を悦びて、我見よがしに着飾れる菊住なり。」と語る時、語り手は登場人物才蔵と同化してしまつてゐるのである。

また、この後、すぐに語り手は、才蔵から離れ、独立している。この箇所での同化は、語り手が先に才蔵について語っており、語りの対象は菊住たちのことへと転換したのであるが、菊住たちの様子を窺つてゐる才蔵のことも意識しているためである。語り手が才蔵から離れ独立した後、才蔵の内語が挿入されてゐる箇所があるが、それも菊住と小へのことについてであり、語り手の意識は、才蔵ではなく菊住と小への方へ向いたままであると言へる。以下に示すのは、才蔵の内語を含む箇所である。

滌ぎし手を拭ひ、空を仰ぎて、帯の間より取出でたる時計は、灯籠の火影に耀めく金側に、才蔵も驚きて、（小へといふ女が然ほどの内證にてはあらざる理。さりとて菊住はあれほどの品を持つべき力はある。左に右小へが且那筋から奪取りたるを物した

るなどにやあらん。今更飽かれた義理にはあるまじき我つを棄て、慾に目が眩れ、小へに見換へたる腹の陋さ。見下げ果てた男め、）と此から其面へ唾吐懸けたき心を鎮め、……（括弧内は才蔵の内語を示す。なお、括弧付けは引用者）

この場面は、才蔵も障子を隔てて菊住や小へを見てゐるという設定であるため、語り手が菊住や小へについて語る時も、才蔵を通して説明となつてしまつてゐる箇所があり、そのため構造が複雑になつてゐるのである。しかし、語り手が注目してゐるのは、菊住と小へのことについてなのである。

この磯馴の場面では、障子を隔てて部屋の中と廊下という二つの場面に、それぞれ登場人物が存在した。語り手は、まず、部屋の中の才蔵と金太郎の様子を語り、それから今度は、廊下の菊住と小への様子について語り、再び部屋の中の才蔵と金太郎の様子について語るというように語り進めている。語り手には一度に両方の様子語る事ができないという制約があるからである。この語られる人物（対象）が転換する箇所に助動詞「けり」が用いられてゐる。この場合も、「けり」が用いられてゐて、語り手はまとめ意識を働かせてゐると考えられる。

・語られてゐる場面の進展期
前の語りが完結するということ、新たな語りが始まるということとは相関関係のうえに成り立つことである。

つまり、新たな語りが始まる場合、当然、前の語りは完結していることである。このように、話を完結させる時、語り手はそれまで語ってきたことから距離を置き、その表れとして助動詞「けり」が用いられていると考えられる。

次にあげるのは、「お艶獲得に関わる語り」の中のことである。章末に助動詞「けり」が用いられている第二十章の次の章、第二十一章の冒頭は、「適宜に話は緩めて銚子を更へ、馬場殿はまだ一向に酔が回らぬ御様子。」と始まっている。ここで、語り手が物語っているのは、余五郎と馬場、そして、馬場に呼び出されたお艶のいる江口屋（宿屋）の二階の場面である。お艶の噂を聞き、彼女に興味を示した余五郎が、お艶に呼び出すために、彼女の琴を聴きたいと申し出るのであったが、昔、自分の家に青菜を担いで出入りしていた余五郎のことを覚えてお艶は、たとえ今立身出世を遂げたといつても、余五郎の前で頭をさげて琴を聴いてもらう気にはどうしてもなれないのであった。お札を奮発されても、宿屋の主人や女房が入れ替わり呼びにきても、かたくなに余五郎のもとへ出向いていくことを拒み続けているお艶であったが、余五郎のもとを訪れていた馬場の一言が加わると、日頃彼には恩を感じているだけに断りきれずに、とうとう江口屋に出向いてくることになったのである。

余五郎の望みとあり、お艶はその場で琴の腕を披露するが、余五郎が琴を好きだというのは真つ赤な嘘であり、余五郎が興味を抱いているのは、琴の音色ではなくて、琴を弾いているお艶の方であった。彼女が事を弾いている時には、余五郎は、睡魔に襲われてうつらうつらとしていたが、その後酒の席となると、しきりにお艶に戯言を言ったりするのであった。しかし、警戒心の強いお艶にストレートに気持ち伝えても事がうまくいかないことは分かり切ったことであり、余五郎は、あくまで昔お艶の両親から受けた恩返しとして、お艶を東京の自分のもとに引き取り良い相手を世話することを願っているのであった。

第二十一章の冒頭の「適宜に談話は緩めて……」の「談話」とは、余五郎がお艶に伴侶を探しに東京へ出てこないかと誘いかける話のことである。余五郎は、第二十章の後わりで東京行きの話を持ちかけるが、第二十一章の始めからは、ひとまずその話はやめて、再び酒宴を盛りたてていくのであった。第二十章の終わりのこの箇所は、余五郎がお艶に東京行きの話をするが、ある程度のところその話を切り上げて再び酒宴をもち立てていったという語りの転換があり、助動詞「けり」が現れてきていると言える。

第二十章の終わりの箇所は、これまで物語の世界を進行させる語りの中に登場していた登場人物お艶や余五郎

の様子を語ることによって、それまでに語ってきた事柄をまとめているのである。第二十章の終わりの箇所を示すと以下のようである。

律義なるお艶は他を疑はず、亡親の恩を忘れず、我身の為に尽くさむとの実意を、便少き心に深く飲ひ、また金沢一の姿を大都会に輝かさむことを想へば、埋れたるたま壁の世に出づる心地して、漫に仇なる了簡も浮立つなり。

余五郎はお艶の聡惚るゝ気色を見て、我が物になるも今一息、と魂の揺ぐやうな巧言を多度聞かせ、架空と見せぬ為(親御への御恩報じ)を台にすれば、愚ならぬ女子も迷の闇を探足に深入りして、やゝ返す路に遠ざかりけり。

物語の世界を進行させていく時には、語り手は自分の存在を表す間がないのであるが、このようにその時の登場人物の様子についての説明をする時、物語の世界は進展していかず、語り手の意識が表れやすい。この場合、引用箇所全体が、それまでに語ってきた事柄についてまとめられている語り手の言葉である。章末の手前のお艶の様子についての語りも助動詞「なり」でいったんまとめられていると考えられる。まず、お艶の様子について語り、そして、余五郎の様子を語っているのである。それぞれについてまとめられているのであるが、助動詞「けり」の表れは、語り手が、それまで語ってきた個々のま

とまりすべてをまとめる最後に表れるのである。第二十章の章末も、語りの転換に伴い助動詞「けり」が用いられていたと言える。

・語る姿勢の転機

ここで、再び「才蔵獲得に関わる語り」の箇所に戻る。第八章の終わりは、ある座敷の場面である。その前に、菊住は、才蔵の家を訪れたのであるが、菊住に腹を立てている才蔵は彼に会おうとせず、「一切に私に、逢ひたいとの思召ならば芸者は呼ばれてお酌を致しまするが商売なれば、お客様は乞食でも穢多でも、人非人でも義理知らずでも、薄情ものでも、畜生でも、其には厭ひなくお対手を致志ましよ。お話とやらがあんならば、何なりとも承はりましよ。」と言ひ放つ。

そこで、菊住はそれを間に受けて、馴染みの待合から才蔵を呼び出すのである。すると、才蔵は呼ばれた部屋には来るが、部屋に入ってきて、初見のように振る舞っていて、全く他人行儀でいるのであった。菊住は、先に才蔵の家で受けた対応について不満を述べるが、そもそも菊住の浮気のことと腹を立てている才蔵は、もう、自分には菊住との縁に全然未練のないことを菊住に告げ、菊住を突き放すのであった。しまいに才蔵は、三味線でもって菊住の横面を打ちつけ、ここで、才蔵と菊住はとうとう決別することになる。

第八章は、「おのれ！無礼な、と立たせも遣らず、才

蔵は袂を蹴開き、飛ぶがごとく通行くを、遁さじと逐蹙くれば、女房に抱留められて、放せ放せと悶ふる間に、はや才蔵は格子を出て、顛顛の辺りに血入染む男の顔を見やりて、張臂に袖を払ひて悠々と立去りけり。」という文で終わっている。

語り手は、登場人物菊住と才蔵それぞれの顛末について語るることによってその場を完結しているのである。菊住は、才蔵に三味線で顛かみの辺りをたたかれ、憤慨し、逃げていく才蔵を逃さないようにと追いかけるが、その場で女房に抱き留められてしまい、一方の才蔵は、早々と格子を出、いったん菊住の顔を見返すと、してやったりと満足し、悠々とその場を立ち去っていくのであった。

これに続く第九章は、第八章の菊住と才蔵の決別の話を受けて、菊住と切れた才蔵に、改めて余五郎が身請の話を持ち出す場面となる。ここは、単に場面の転換の箇所というのではなく、これまで物語の場面の説明をしてきていた語り手が、物語の進展をいったん止めて語りを続けている。

第九章の冒頭では、「其力神の如しとて、何人か拝金宗といふ教を立てぬ。信に世間金に勝つべきものはあらじと覚えたり。」と世間一般の様子や挿評が語られている。挿評は、物語の世界の事柄を語っているうちに、つい、自分の意見や感想を述べてしまうというもので、語ってきた後に位置する場合もあるし、また、これから語つ

ていく事柄について語り手が先に挿評を述べることもある。この場合、この挿評がその後語っていく事柄に基づいたことであるため、第九章の始めから語り手が新たな展開で進んでいっていることが分かる。世間一般の様子や挿評が新たな話が展開されていく最初に現れるというのは、明治初期の小説に多々みられた特徴である。このような語りから始まっている箇所は、ここから新たな展開をしていこうとしていることが予想され、実際この箇所の場合も、ここから余五郎が才蔵に身請け話が進展していくのである。

第八章末の助動詞「けり」は、第八章の内容を検討した段階で、才蔵と菊住の決別の話が完結している箇所であると説明がついたのであるが、続く、第九章の語りについても検討してみた結果、第九章は冒頭の世間一般の様子、そして、語り手の挿評から、今度は余五郎が才蔵に身請けの話を持ち出していく話が始まっていることが確かめられた。そこで、改めて、第八章の章末「けり」は、語り手がそれまで語ってきた事柄すべてをまとめ完結する働きを持っていると言えるのである。

このように、文中に用いられる場合についても、語り手のまとめ意識が働いた箇所に「けり」が用いられていると言える。ここであげた例は、章末に現れる「けり」が多いが、それは、章末だからというのではなく、たまたま語り手のまとめ意識が働きやすいのが章末であった

ということである。

四、助動詞「き」との比較

助動詞「けり」の用いられているところに語り手のま
とめ意識が働いているということは、助動詞「き」の用
いられている箇所と比較してみると、より顕著である。
次に、余五郎の人物説明の箇所から二カ所引用する。

余五郎其時二十四なりしが、機敏鬼神の再生、と大富も
舌を巻きて手足の如く頼めば、余五郎も此奴骨ありと服し
て勤めける程に、立身衆に越えて、一年の間に世智賢きも
のばかり聚めたる三三十ひとの上席にすわり、大原組の一
番々頭余五郎の下に様の字を附けられ、会うものゝ頭は先
方から下がりぬ。其中には四五年前には、附くな附くなと
袂を振りし旦那様もあるべし。

この例で、助動詞「し」が用いられているのは、余五
郎の歳や「旦那様」の様子を示すところである。一方、
助動詞「けり」の用いられている箇所は、「し程に」と
いうようにどんな時なのかを説明しておいて、それ以降、
その場の様子説明が続く。つまり、語り手にそこまで
語ってきたことを、そこで、いったんまとめて提示して
いると考えられる。

次にあげる箇所にも、助動詞「き」「けり」の間に同
じ様な使い分けが見られる。

其後は余五郎鉾山に限らず、どきりと儲かるほどの
事には、先鞭に首を入れて逸すことなかりしに、折々
の些細の損は、一度の大儲に埋合せて、次第に仕出
しける上、明治維新の擾乱に紛れ、為たい三昧の旨
い事して、一網に五六万の利益は、其折わづか十五
兩で買置きたる地面の、泰平になりてから暴に二千
円になりけるなど、さる類の多かりき。(第一章)

この箇所は、勤め先の主人大富が亡くなった後の余五
郎の様子が説明されている。「しける上」というよう
にいったんまとめた上で、さらに「明治維新の擾乱」の
話へと進んでいくのである。助動詞「ける」は、それま
で語ってきた、儲かる事を述すことがなかったという事
と、時々のちよつとした損は一度大儲で埋め合せてやっ
てきたということ両方のことをまとめる意識が働いてい
ると考えられる。

一方、助動詞「し」の用いられている箇所は、語りの
上では、しして、ししてというように続くところであつ
たり、様子説明がつけ加えられているにすぎず、語り手
の語る姿勢は見えてこないのである。

語り手の語る姿勢は、語り手自身が物語る事柄を客観
視することができる時に表れてくる。つまり、語り手と
語り手が物語る事柄との距離がある時である。そして、
その目印となるのが、助動詞「けり」の用いられている
箇所なのである。

五、まとめ

助動詞「けり」は、文末・章末といったところに多く用いられている。それは法則性ではないが、そのような箇所現れやすい性質を助動詞「けり」は持ち合わせている。そこで、それを手がかりに実際助動詞「けり」が用いられている箇所を検証し、助動詞「けり」が用いられているのは、語り手のまとめ意識の働いた箇所と定義づけたのである。

例をひきながら見てきた、語られている場面（対象）の転機、語られている場面の進展期、語る姿勢の転機は、単なる物語の世界の事柄のひとまとまりとなる箇所ではなく、語り手にまとめ意識の働いた箇所であると言える。それは、助動詞「き」との比較でも言えることであつた。助動詞「けり」が語り手（話者）のまとめ意識を表すという定義は、「けり」の現れやすい箇所を検討することによって導いたものであるが、一方、「けり」に注目することで、今度は、語り手のまとめ意識の働いている箇所を探ることができる。と考える。

（そねはら なみ 上田市立塩田中学校）